研究課題　菅浦現地伝来史料の作成時期と料紙に関する研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　青柳周一（滋賀大学）

　所内共同研究者　末柄豊・井上聡・高島晶彦

　所外共同研究者　宇佐見隆之（滋賀大学）・大河内勇介（福井県立歴史博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

　滋賀県長浜市西浅井町菅浦は国宝「菅浦文書」（一二七一点。滋賀大学経済学部附属史料館寄託）が伝来した場所として有名であるが、現地の阿弥陀寺をはじめとして、この「菅浦文書」とは別に、中世の年紀が記された史料が伝来している。作成時期が近世である可能性も考えられることから、本研究では使用されている料紙にも注目して精査を行う。あわせて「菅浦文書」中に含まれる近世史料や、字の形状等から中世ではなく近世の作成という可能性がある史料数点についても、内容や紙質等について多角的な比較検討を実施する。

（２）研究の成果

　コロナ感染による警戒が続くなか、一二月に一度、滋賀大学経済学部附属史料館および菅浦区において史料原本の調査を実施することができた。史料館においては、国宝菅浦文書のうち従来作成年代などに疑義が呈されている史料約三五点について、最新機器を用いてその紙質分析を詳細に実施した。また菅浦区内の阿弥陀寺に蔵される同区有文書の調査も実践し、中世にさかのぼる可能性のある文書約一〇点を対象とした。調査結果の詳細な分析と検討は進行中であるが、概報に従うならば、紙質の面からみると、菅浦文書に寄せられた疑義の多くは退けられる可能性が高く、研究史の見直し・再検討が予想される。また菅浦区有文書については、近世の写という可能性が極めて低いことが確認された。こうした成果は現在刊行の準備を進めている史料集、『菅浦文書集成（仮）』（吉川弘文館より上下二巻で刊行予定）に反映させてゆく予定である。  
なお本調査の成果等は、二〇二二年度一般共同研究「国宝菅浦文書と関連史料の伝来形態と料紙に関する研究」（研究代表　宇佐見隆之・滋賀大学教育学部教授）に引き継ぐ形でさらなる推進を図ってゆく予定である。